

勤務医部会だより

2つの自治体病院の統合—公立西知多総合病院



幹事 浅野 昌彦

2つの自治体病院の統合により愛知県東海市に新病院が誕生しました。東海市と知多市は知多半島北西部に隣接し、それぞれ東海市民病院、知多市民病院を運営し地域医療を担っていました。両病院の老朽化による建て替えの必要性が検討される中、平成20年、深刻な医師不足による診療科の休診や救急医療の機能低下が発生し、2つの市民病院を完全統合して適正規模の総合病院を建設する計画が両市で協議されました。平成22年に両市により西知多医療厚生組合が設立され、平成27年5月1日に「公立西知多総合病院」が開院しました。病床数は468床で、ICU8床、救急病床12床、知多半島初の結核モデル病床10床、緩和ケア病床20床を含みます。診療科は30科で、関連大学病院から医師派遣をいただき常勤医70名体制でスタートしました。病院組織の特色として、断らない救急医療の拠点として、救急部・集中治療部からなる「救急診療センター」、医療安全管理室と感染対策室からなる「医療品質管理センター」、入院前から退院後まで切れ目なく患者を支援するため相談と地域連携を多職種で行う「患者サポートセンター」、人間ドック・住民健診・企業健診を担う「健診センター」に加え、「手術センター」、「内視鏡センター」、「血液浄化センター」を設置しています。

2つの自治体病院の統合において労力を要することは2病院のスタッフの統一です。医師においては、多くの診療科が同じ大学医局からの派遣であり統一は容易でしたが、派遣大学が異なる診療科においては1診療科1大学医局を基本としていたため、それぞれの大学医局間で協議して調整して頂く事になりました。何度も医局を訪問して調整を図りました。

スタッフの多数を占める看護部の統一は大変でした。開院2年前から両病院の看護師の人事交流を始めましたが、それぞれ30年以上の歴史を持つ両市民病院の看護の仕方に違いがあり、2つの看護部組織

が並立することでなかなか統一が進みませんでした。そこで名古屋大学病院の看護部から新病院の看護部長にふさわしい方を派遣していただき、大学病院の急性期医療看護を基本にして看護部の統一を図ることになりました。新看護部長の多大なる努力により新病院の看護部体制をつくることができましたが、新体制に馴染めず退職する看護師もあり、看護師確保が課題となりました。

医療スタッフは全て平成27年4月30日旧病院の閉院に合わせて一旦両市から退職し、5月1日付けで西知多医療厚生組合職員に移行しました。しかし、旧病院の医事課・管理課からなる事務部門は、それぞれの市からの派遣職員のままです。両市の職員が事務局で机を並べていますが、相互の連携が今ひとつで、業務が縦割りに成り易く、効率的な事務運営を期待するには不向きな状況です。業務の効率化と迅速化を図るように事務局幹部に改善をお願いしています。今後、病院経営を専門とする事務職員を組合で独自に採用する必要があります。

新病院が開院して3ヶ月が過ぎ、初導入の電子カルテの混乱は解消し、診療業務も円滑に進むようになりました。病床稼働率も順調に伸び、病院の3つの大きな使命である「質の高い医療の提供」、「24時間断らない救急医療」、「地域医療機関との連携の強化」を達成するようスタッフもそれぞれ頑張ってくれています。

公立西知多総合病院は、知多半島北部の急性期医療の中核病院としての実力を付けていき、地域医療に貢献していきます。



(公立西知多総合病院)